

# コロナ治療薬 開発加速

## ウイルス量減／肺組織修復

国内の製薬各社が新型コロナウイルス治療薬の開発を加速させている。世界中でワクチン接種は進んでいるものの、コロナ禍以前の日常を取り戻すには、様々な症状に対応した治療薬が不可欠だ。海外勢にはワクチンの実用化で先行しており、巻き返しを図る。

(三島清樹)

社開発した関節リウマチ治療薬「アクトマ」を新型コロナウイルス向けに転用でき、今年、年内にも国内で承認申請する方針だ。

### ■競争

で、肺組織の炎症を抑え、修復を助ける薬を開発しており、重症者にもくみられる「急性呼吸窮迫症候群（ARDS）」の治療に使うことを想定している。原田雅充社長は、重症者が減れば、病床の逼迫を解消できる」と意義を強調する。

### ■高いハードル

ウイルスの遺伝子解や病状の解明が進み、治療薬の開発スピードは上がっているものの、実用化は簡単ではない。小野薬品工業は、慢性肺炎の治療薬「フオイ」をコロナ治療薬に転用することを目指していたが、断念した。厚労省の支援対象だったが、治療の結果、期待した効果が得られなかった。同様に武田薬品工業は、米韓の製薬会社などと共に進めていた血液製剤の開発を中止し、第一三共も吸入薬の開発を取りやめた。

## 国内各社

■承認申請  
厚生労働省が現在、新型コロナウイルス治療薬として承認しているのはウイルスの増殖や炎症を抑える3品目だけだ。薬の種類が増えれば、患者の症状や副作用の可能性などに応じた処方への選択肢が広がり、治療効果の向上が期待できる。  
政府は2020年度補正

予算で、製薬会社が国内で実施する治療薬の臨床試験（治験）を支援するため70億円を計上している。  
支援対象の一つに選ばれたのが、6月末に中外製薬が厚労省に承認申請した「抗体力クテル療法」と呼ばれる点滴薬だ。米リジェネロンが開発し、米国では緊急使用許可を得ている。  
海外の治験では、入院や死亡のリスクを7割減らす効果が確認されたという。  
中外製薬はほかにも、幅広い症状に対応できる飲み薬の治験を進めている。自

ウイルスの活動を抑える抗体を組み合わせた「抗体力クテル」の点滴薬を6月に厚生労働省に承認申請。抗ウイルス効果のある飲み薬で、近く治験を開始。重症化を抑制する治療薬も米企業と開発中。  
リボ核酸を体内に投与し、疾病を治療する核酸医薬の技術を活用。2022年度に治験開始。  
コロナから回復した患者が持つ中和抗体を使った治療薬。慶応義塾大と共同研究。  
ヘその緒（さいず）由来の幹細胞を活用。重症患者向けで、日本医療研究開発機構が支援。  
人の脂肪から培養した幹細胞を活用。重症患者向けに治験を実施中。

|                        |             |
|------------------------|-------------|
| ●製薬会社の新型コロナウイルス治療薬開発状況 | 中外製薬        |
|                        | 塩野義製薬       |
|                        | 日本新薬        |
|                        | 田辺三菱製薬      |
|                        | ヒューマンライフコッド |
|                        | ロート製薬       |

ロート製薬は再生医療の技術を用いたコロナ治療薬の開発に取り組み、同社提供